

ノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥングは、とりあえず戦争が無いというだけの状態を「消極的平和」と呼び、貧困・抑圧・差別などの構造的な暴力が取り除かれた平和を「積極的平和」と区別しました。私達のもとに届く痛ましいニュースの数々…「積極的平和」の観点から言っても、この国は平和とは言い切れない状態にあります。そして、その痛ましい出来事の背後にある人間社会の闇や歪みは、時に、なす術なく、立ち尽くすしかないほどに根深いものであると感じさせます。それはやがて、平和に対する熱意さえも萎えさえ、意気消沈させてしまうほどの力を内含しているように思います。

イエスは「ひとり人里離れた所に退かれた」とあります。イエスの良き理解者であった洗礼者ヨハネが殺害されたという知らせを聞いたことと関係しているようです。23節から判断するに、イエスは神に祈り、神においてこのヨハネに起こった不条理な事実を受け止め直そうとされたのではないかと想像します。十字架で処刑される前夜には、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願い通りではなく、御心のままに」（26:39）と祈り、ご自分の受難を神において受け止め直していくイエスの姿がありました。神の御心が成る…それを信じることなしに、この現実を受け止めていくことはできない…そんなメッセージをも感じ取ります。

夕暮れが迫った頃、弟子達は、イエスのもとに集まってきた群衆を解散させ、村に食べ物を買に行かせようと提案します。食べ物を手配できる場所は「人里離れた所」ではなく、「村」だと彼らは考えていたからです。彼らにとって、人里離れた所は「パン5つと魚2匹しかない」と感じさせる場所でした。ところがイエスは、「あなた方が与えなさい」と命じ、手持ちのパンと魚を「私に、ここに持って来なさい」（直訳）と言われます。そして、祈りを捧げた後に、それらを弟子達に配らせると、すべての人が満腹する者へと変えられていくのでした。

「人里離れた所」…そこは5千人以上いた群衆のお腹を満たすには、なす術なく、立ち尽くすしかない現実が示された場所です。しかしイエスの目に、そこは神が共におられる場所として映っていました。「これしかない」と自分の微力を嘆き、平和を諦めさせるような力が渦巻くこの世の闇…しかしその現実の只中で、たとえ小さな愛の業だとしても、「私に、ここに持って来なさい」と平和を諦めず、それをういて神の驚くべき業を成し遂げようと招かれる主イエスの言葉が光り輝いています。

（文責：望月達朗牧師）

